

WITH YOU

保険情報ペーパー「ウィズ・ユー」

不慮の事故で年間3.8万人が死亡

高齢者が7割超占める 窒息、転倒、溺死増える

現在、日本人の死因の5位は、窒息や転倒・転落、交通事故などの「不慮の事故」となっています。厚生労働省がまとめた「不慮の事故死亡統計」によると、平成20年に不慮の事故で亡くなった人の数は3万8,153人で、ここ10年余りは4万人前後で推移しています。原因別では、食べ物をのどに詰まらせるなどの「窒息」が9,419人と3年連続で最多、全体の24.7%を占めています。そして、「交通事故」7,499人（19.7%）、「転倒・転落」7,170人（18.8%）浴槽などでの「溺死（水死）」6,464人（16.9%）、「火災」1,452人（3.8%）と続いています。平成17年まで最多だった交通事

故は平成7年から半減し、その一方で、窒息、転倒・転落、溺死が2～3割増加しています。

また、高齢化に伴い不慮の事故で亡くなるお年寄りの割合が年々増えているのが特徴です。65歳以上の死亡数は全体の72.5%を占め、2万7,664人にのぼります。75歳以上で55.0%、85歳以上でも25.3%となっています。しかも、交通事故の場合、65歳以上の高齢者が占める割合は約50%であるのに対し、窒息、転倒・転落、溺死の場合では、いずれも80%前後になっています。

家庭での不慮の事故による死亡数は1万3,240人、その内訳は溺死4,079人、窒息3,995人、転倒・転落2,560人などです。溺死は10年前と比べ1.37倍に増えており、高齢者の自宅の風呂場での事故が多いと



みられています。溺死は冬場にとくに多く発生していることから、急激な温度差を体感することで、体内に急激な血圧変化が発生し何らかの影響を及ぼす「ヒートショック」が原因だと考えられています。

今までまったく問題なく生活できていた住まいであっても、加齢に伴い事故に遭うリスクが高まります。家族構成や年齢に合わせ、事前に対策を講じるようにしましょう。

短期化の傾向ですが...年齢や病気の種類によっては長期化も

病気・ケガによる平均入院日数35.6日

高まる健康への関心 いざという時の備えも

健康や食生活への関心がますます高まっていますが、その背景には健康に対する不安があるようです。内閣府「国民生活に関する世論調査」(平成21年6月調査)によると、日ごろ、悩みや不安を感じている内容として(複数回答)最も多いのが「老後の生活設計」(54.9%)で、次いで「自分の健康」(49.2%)となってい

ます。また、4番目にも「家族の健康」(41.4%)が入っています。こうしたことから、病気やケガになった場合の経済的な備え(医療保障)に重点を置く人も増えています。

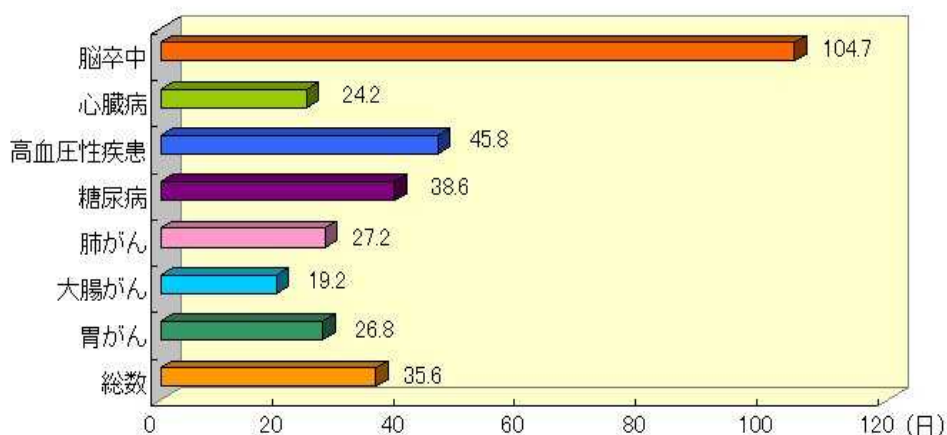
入院した場合に心配なのが、長期入院による経済的な負担が重くなることあげられますが、厚生労働省「平成20年患者調査」によると、退院患者の平均在院日数(入院日数)は35.6日(病院:37.4日、一般診療所:18.5日)と

なっており、3年前の調査より1.9日短くなっています。年齢別では、15~34歳で13.0日であるのに対し、35~64歳では29.5日、65歳以上になると47.7日と、年齢が上がるに従って長期化する傾向にあります。

傷病別では、肺がん27.2日、糖尿病38.6日、心疾患(心臓病)24.2日、脳血管疾患(脳卒中)104.7日などとなっています。また、手術を受けた場合の手術前平均在院日数は5.8日、手術後が14.5日です。ただ、開頭手術の場合では手術前が9.8日で、手術後は41.4日と非常に長くなっています。

医療費の多くは公的医療保険でまかなえるとはいえ、個人の負担額は少なくありません。例えば、先進医療(厚生労働省が一定の基準をもって承認した最新医療の呼び名)の技術料もそのひとつです。公的医療保険の対象とならず全額自己負担となり、その費用は高額になる場合もあります。日ごろから健康維持に努めることはもちろんですが、いざという時の備えについても考えておくことは大切です。

退院患者の平均在院日数(厚生労働省「平成20年患者調査」)



あなたのパートナー

保険情報サービス株式会社

〒120-0005 東京都足立区綾瀬3-16-4 とうしんビル3F

TEL03-5682-7070 FAX03-5682-7071